おもシロ！城郭つうしん　第７回

松林家文書
＜石川数正の松本城への思い＞

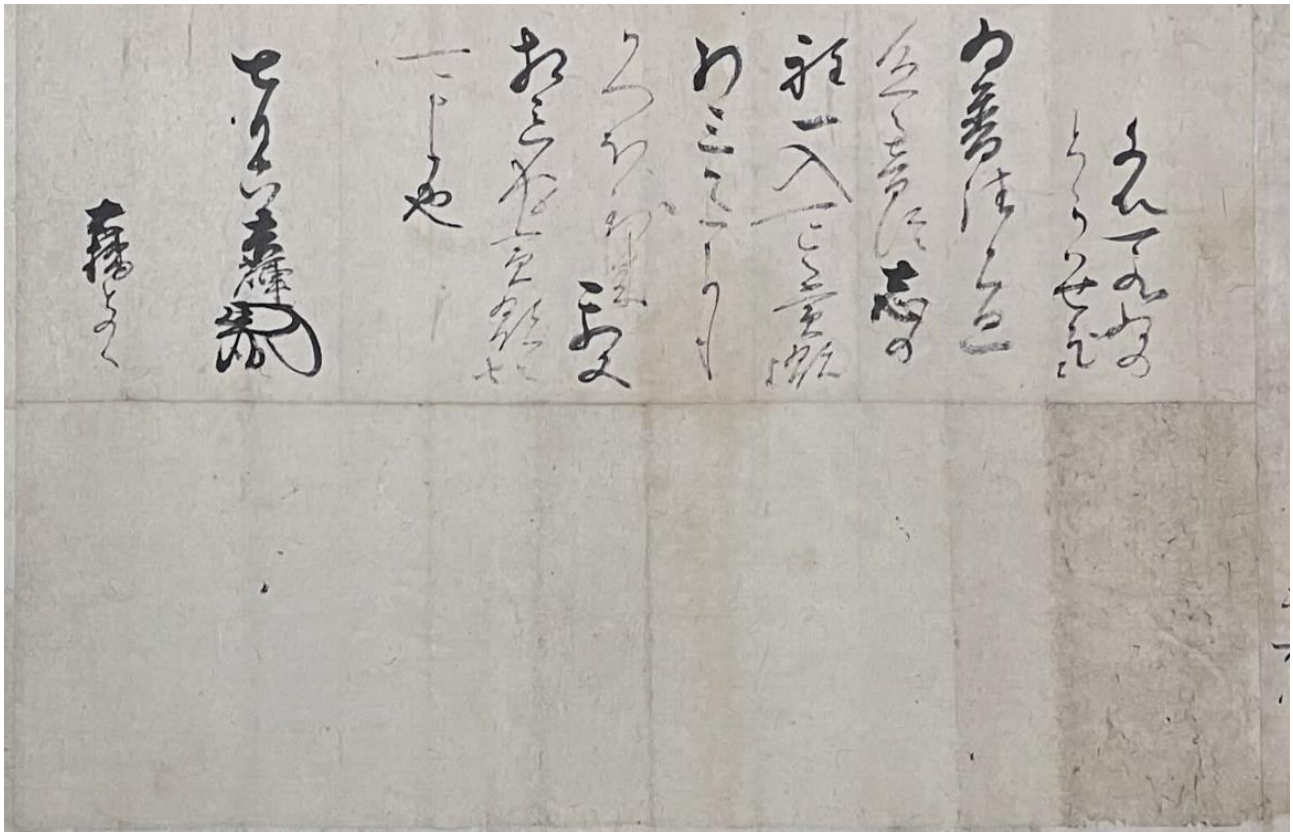
第 6 回でお話ししましたように、天正 18 年（1590）の 9 月ごろに松本へ入った石川数正は松本城の天守建築とともに城郭の中の普請を始めたと考えられます。しかし天正 19 年（1591）9 月 23 日には秀吉のお咄衆（秀吉のそば近くに仕えて、お話をする役目）を命じられます。このときはすでに京都にいたものと思われます。さらに文禄元年（1592）3 月 18 日には京都から肥前名護屋城（現在の佐賀県唐津市）まで遠征します。山科言経という公家が書いた日記『言経卿記』には「千石権兵衛・石川出雲守（数正）その他大勢が出陣したので見物にいった」と書かれています。

お咄衆となってから名護屋出陣までの半年ほどの間に数正が松本に帰ったかはわかりません。

数正は出陣以後松本に帰ることはありませんでした。その年の 12 月 14 日に京都の七条河原で数正のお葬式が行われました。先ほどの『言経卿記』に書かれています。

名護屋へ出発してからの数正の行動はまったくわかりません。いつ、どこで、どうして亡くなったのかも謎のままです。わずかなてがかりになるのは、数正が名護屋から送った手紙です。8 月 7 日の日付で伊勢神宮の神主の丸岡宗太夫に贈り物のお礼をしているのが最後です。ですから数正が亡くなったのはこれより後になることまではわかります。それでは松本城はどうなっていたのでしょうか。

松本城には主人がいないままの状態です。天守の建設はもちろんですが、石垣の築造や堀の工事などは行われていたのでしょうか。そして城主の数正はどのような気持ちで名護屋にいたので



しょうか。今回はそれについてヒントを与えてくれる文書を紹介しましょう。

普請の見まわりとして
いろいろと便りをくれて、その気持ち
は非常にありがたいことだ。
またかつお節も届いてこれもまた
思いがかなった。大変うれしいことを
伝えようと思う。

七月十八日　吉輝（花押）

右橘どのへ

この文書は松本市渚の松林さんのお宅に伝わる貴重なものです。「吉輝（よしてる）」とは数正が最後に使った名前で、秀吉の「吉」の字をもらっています。宛先の「右橘（うきつ）どの」は松林さんのご先祖で、古くから深志（松本）に根づいていた家柄です。

右橘は「普請みまわり」という役目についていて、数正にその様子をいろいろと手紙にして伝えていたことがわかります。

普請とは松本城の土木工事などを示していると思われます。その見まわり役として工事の進み具合などを手紙で知らせていたのだと思います。

ほかに考えられるとすれば、数正は箇山寺御殿（こさんじごてん）というお屋敷を建てたとも伝えられますので、もしかするとその普請も含めていたのかもしれません。

この手紙には年号が書いてありませんが、肥前名護屋城から出したものとすると、数正が亡くなった年の文禄元年（1592）と考えてまちがいがないでしょう。おそらく、自分の留守中に行われる普請を数正は遠い肥前国（ひぜんのくに）で気にしていたことと思われます。だからこそ「普請見まわり」を命じてその様子を報告させていたのだと考えられます。

数正は実際にその目で安土城を見ています。そして大坂城も見ています。天守をもつ城とはどういうものなのかわかっていただけに、松本城には強い思いがあったことでしょう。

しかし、松本城天守の完成を見ることなく数正は亡くなりました。城主不在の松本城はどうなったのでしょうか。（第 8 回へ続く）